OPGE 通信
Office of Promoting Gender Equality in Tokyo Gakugei Univ.
Vol.24
March.21

東京学芸大学男女共同参画講演会

3CH チャンス、チャレンジ、チェンジ：地質屋の出産・育児と教育・研究・社会貢献

金沢大学名誉教授　田崎和江

日時：2012 年 12 月 12 日　15~16 時半
場所：N410 教室

第14回男女共同参画フォーラムは、地質学者の田崎和江氏をお迎えし、決して平坦ではなかったこれまでの学者人生についてお話いただきました。壇上に上らず、歩きながら、聴衆に問いかけながら、話をする。持参したガイガーカウンターで世界中から集めた様々な鉱物の放射線値を測定してみせる。ネパールの子供達が置かれた状況を，思いをこめて話す。田崎氏にとって、研究は社会に、そして世界に繋がる窓なのだということを肌で実感できる講演会となりました。

講演要旨

Chance, Challenge, Changeの3CHは「チャンスをつかみ、チャレンジをすれば、何かが変わる」という意味です。私はこれまでの人生で二十数回の引越しを経験し、母も含めた家族六名は、東京、鳥取、島根、愛媛、石川、カナダ、ベトナム、タンザニア、オーストラリアで集合・分散・メンバーチェンジを繰り返した<核分裂家族>です。私の半生は夫をはじめ家族の理解と協力の上に成り立った3CHの連続であったといえます。

定時制高校で地学の面白さを学ぶ

戦後の貧困の中、某歯磨き粉製造企業の包装工になり、夜は両国高校定時制に通いました。放課後は地学クラブに所属し、週末は先生に連れられて伊豆大島の火山、埼玉･長瀞の岩石、千葉県の化石とりなど方々に行きました。この頃地学の研究をしたいと思うようになり、将来の方向がほぼ決まりました。

大学で結婚、子連れの教職時代

高校卒業後、東京教育大学教職員組合に勤めながら受験勉強をし、東京学芸大学教育学部理科に入学、念願の地学の勉強を始めました。授業の後は東京教育大学で化石の研究に専念、三年時には地質学会でその成果を発表しています。

一方、大学一年で高校の非常勤講師をしていた夫と結婚し、三年の時には長女が生まれました。子供を義母に一年間預け、卒業式の日に迎えに行きました。東京都の小学校に就職しましたが、一児の母親と知った保護者はさぞかしびっくりしたことでしょう。この時、夫は岡山大学温泉研究所に助手としての就職が決まり、別居が始まりました。

生んで、育てて、研究して

一年後、夫の赴任地である三朝町に合流したのですが、教職はまったくありません。そこで念願であった岡山大学温泉研究所の研究生となり、指導教官もなく独学で大山火山灰の粘土鉱物の研究を始め、29歳の時に博士論文を東京教育大学に提出しました。論文の口頭試問は難なく通ったのですが、博士課程に在籍していなかったため、地学関連の専門科目、英語とドイツ語の筆記試験が三日間びっしりとありました。やっと理学博士になった時には既に30歳、二児の母親になっていました。

その年、イギリス・オックスフォード大学で開催された国際粘土学会で発表することになり、せっかくお金をかけて初めて外国に行くのだからと、ヨーロッパを一人で回りました。この旅行で多くの研究者と知り合いになり、語学にも自信がつき、何より将来の道を開くことができました。まさに3CHでした。

日本がだめなら、世界があるさ！！

名もなく、貧しく、引っ張ってくれる指導教官もおらず。悶々とした４～５年が過ぎ、もうすぐ35歳になる時、転機が訪れました。「日本がだめなら世界があるさ」とカナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスの大学に手紙を書き、論文を送ったのです。なんと、全ての国から「Welcome」の返事がきてびっくり。最初に返事をくれたカナダ、アルバータ州カルガリーのカナダ地質調査所に行くことにしました。子供二人は夫と私の母が日本で世話をしてくれることになりました。「一人で思い切り勉強して来い」と皆から背中を押され、単身船出しました。これも3CHでした。

カナダで、研究して、育児した10年間

カナダ地質調査所には二年間在籍し、その後ケベック州モントリオールのマッギル大学に一年半、オンタリオ州ロンドンのウェスタンオンタリオ大学に六年間所属し、1980年から合計約10年間、カナダで研究・教育に携わりました。その間、石油の研究のほか、当時の日本ではまだ広く知られていなかった「大気・水・土壌の環境科学」を学びました。特に、電子顕微鏡を駆使した微生物による生体鉱物化作用の論文を沢山書きました。

三箇所の研究機関を渡り歩いたのは、カナダ地質学会での発表後、見知らぬ教授が名刺を持って来て、「今の発表は非常によかった。ついては、うちの大学に来ないか」とスカウトされた結果です。まさに3CHを地で行った転勤でした。

カナダでの10年間に、夫、母、子供二人が1～2年ずつ訪れては、交替して帰国しました。三年目に三女が生まれました。ウェスタンオンタリオ大学の保育所は学生優先のため、スタッフの私は空き待ちです。そこで育児のために、70歳の母が来てくれました。母はもちろん英語はわかりませんが、物怖じすることなく、日本語で近所の奥さん達の仲間に積極的に入って一年間、育児をしてくれました。母も3CHの生活でした。母の帰国後、三女が6歳になるまで私が一人で育てました。

44歳で日本に帰国

44歳になった時、島根大学理学部地質教室から助教授の話がかかりました。六歳になった三女を連れ、全財産である本や論文を入れたダンボール20箱を持っての帰国でした。島根県松江市で、三女、母、私の三人の生活が始まりました。夫は愛媛大学に移り次女と暮らしており、長女は東京の大学にいたので、家族は三箇所に分かれての別居生活でした。小学校一年の三女にとって松江は初めての日本、ストレスがいっぱいでした。

金沢大学教授に就任、そして夫の逝去

金沢大学教授の公募にチャレンジし、49歳で女性初の教授職に就任しました。このときも3CHを地で行ったものでした。大型研究費を獲得し、毎年30数名のゼミ生が一丸となって、生体鉱物学を推進し論文や著書を多数出しました。1997年1月には、ロシア船籍・ナホトカ号の重油流出事故が日本海で発生し、能登半島一帯が重油で汚染されました。ゼミ生全員が野外調査をし、浄化方法を探り、重油分解細菌を発見しました。

10年前に逝去した夫とは、亡くなるまでのたった三年間だけ、金沢で初めて同居しました。彼の口癖は「勉強は自分のためにし、社会のために働け」でした。

地質屋の国際貢献

定年退職後は発展途上国に貢献しようと決めていました。ベトナムのラックホン大学で一年、タンザニアのドドマ大学で半年、地球環境学と日本語の教鞭をとりました。

2011年3月11日の東日本大震災後、5月下旬にタンザニアから急遽帰国し、福島県南相馬市に入り、現在も放射能汚染した水田土壌の除染と研究に取り組んでいます。また、仮設住宅を訪ね、安全な米、野菜、果物を届け、手工芸品を製作するなどささやかな支援をしています。自費出版した『地質屋の“なんとかしなきゃ”』には、昨夏、ピースボートで世界一周して放射能測定した結果や長崎・広島の被爆者証言、チェルノブイリの経験、福島への提言などを盛り込んでいます。

「UN Women ミチェル・バチェレ事務局長に聞く会」に参加して

UN Women（ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための国連機関 UN Women United Nations Entity for Gender Equality and Empowerment of Women）は、2010年7月の国連総会決議において、既存のジェンダー関連4機関（ジェンダー問題事務総長特別顧問室（OSAGI）、女性の地位向上部（DAW）、国連婦人開発基金（UNIFEM）、国際婦人調査訓練研修所（INSTRAW））を統合し、「ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための国連機関（UN Women）」として発足することが決定され、2011年1月1日より活動を開始した機関です。その初代事務局長ミチェル・バチェレ（元チリ大統領）が来日したのを機に、2012年11月13日、一橋講堂において表題の会が開催されました。

国井秀子（男女共同参画推進連携会議企画委員：リコーITソリューションズ株式会社取締役会長）司会進行の元、はじめに前川清成内閣府副大臣から、女性の活躍促進を日本再生の柱として取り組んでいるが、我が国の男女共同参画の現状は必ずしも十分とは言えないので、今回の講演が男女共同参画社会実現の大切な一助としたいと挨拶がありました。

バチェレ事務局長からは、UN Womenの3つの最優先課題である、女性の政治参画の促進とリーダーシップ、女性の経済的機会の拡大、女性・女児に対する暴力の撤廃の現状と課題、また、経済・政治・社会において、これまで以上に女性の力を発揮する必要があると期待が述べられました。その後の会場との意見交換では、時間が足りず途中で打ち切らざるをえないほど多くの質問がありました。ミチェル氏は医師として母として政治家として活動してきた、必ずしも順風満帆でなかった経験を踏まえながら、それを乗り越えてエンパワーメントし、女性が男性と共に社会を支えていく中心になっていける可能性を多くの女性が持っていることを熱く語っておられました。

（文責　大竹美登利）

2012年度、村松泰子学長が学外で行った男女共同参画関連の講演一覧

● 2012.10.14（日）「男女共同参画社会に資する学校教育・大学とは」
（一般社団法人大学女性協会主催シンポジウム「男女共同参画社会の形成と教育」）
● 2012.11.29（木）「なぜ大学における男女共同参画推進が必要なのか」
（国立女性教育会館主催「大学等における男女共同参画推進セミナー」）
● 2012.12.21（金）「大学を取り巻く社会情勢と地方大学に求められる女性研究者支援」
（第三回愛媛大学女性未来育成センター主催シンポジウム「選ばれる魅力ある大学へ～女性の元気が地域を生かす～」）
● 2013.02.22（金）「大学における男女共同参画推進について」
（京都工芸繊維大学主催男女共同参画推進キックオフセミナー「女性研究者の活躍と男女共同社会」）

男女共同参画支援室からのお知らせ

院生・卒業生・学部生交流会を開催しました

2012年12月19日（水）、学芸カフェテリアとの共催で、「女性研究者へのキャリアパス：院生・卒業生と語ろう！」と題した院生・卒業生・学部生交流会を開催しました。研究者になる道について語る機会がこれまであまりなかったとのことで、男子学生含む18名が参加されました。理系・文系のそれぞれ本学大学院在学中の方、卒業されてすでに研究者としてのキャリアを歩み始めた方たちが、ご自身の経験についてとても率直に発表してくださいました。参加者からもさまざまな質問が出て、進学という選択肢を考える場が今後も必要であることがうかがわれました。

相談サービス・メンター制の院生・学部生説明会を開催しました

2013 年 2 月 6 日(水)、ランチの時間を使って、女子学部生・院生に向けたメンター制度と相談サービスの説明会を行いました。当日は、メンター・メンティの経験者の方から、体験談をお話ししていただきました。また学生の方には、試験期間中にもかかわらず、忙しい時間の合間を縫って参加していただきました。仕組みに関する質問だけでなく、実際のメンタリングのテーマにふさわしい質問も出て、活発な意見交換の場となりました。今後周知広報を工夫して、より多くの学生の方にもサービスを使っていただきたいと思います。

∞(無限)ーの会を開催します

男女共同参画推進本部・男女共同参画支援室は、毎月 8 日(平日のみ)に本学の女性教員(常勤・非常勤)を対象としたランチ会「∞の会」を開催しています。毎回リラックスした環境で情報交換・交流・ディスカッションを行える場となっています。女性教員の皆様、お誘いあわせの上ぜひご参加ください!

日時:　毎月 8 日(平日のみ) 12:00〜12:50

場所:　第 1 むさしのホール 1 階　教職員ラウンジ

2013 年度の開催予定日:　4/8(月), 5/8(水), 7/8(月), 10/8(火), 11/8(金), 1/8(水)

「だから女はだめ」なのか　人文社会科学系　伊藤由希子

一般に女性参画の制度設計には二種類ある。「女性に休むインセンティブを与える制度」と「女性に働くインセンティブを与える制度」だ。前者は、休業(給与や身分の保障付)を拡充する育休制度など、「休む者を労わる」制度であり、後者は、保育サービスに代表される、「働く者を助ける」制度である。今後、充実が必要なのは明らかに後者であろう。

前者の必要性は無論否定しない。出産で体が回復しないときなど、女性が休まざるを得ないことは多々ある。しかし、制度の優遇が行き過ぎると、利用者が事実上非労働力化し、職場、ひいては社会の生産性が大きく損なわれる。そもそも働く者は誰しも様々な課題を抱える。その中で、育児が見えやすい課題というだけで過剰に優遇されると、他の者に業務のしわ寄せがいき、不公平感とともに「だから女はだめだ」となる。個人への諦観で済めばよいが、制度への否定感から、適切に利用したいと思う有能な女性たちが後に続くことが難しくなると、何のための制度かわからない。

一方、後者の「働く者を助ける制度」は、活用されれば職場や社会の生産性は損なわれない。私自身もこの諸制度に助けられている一人である。産後二か月から半年、子どもを担いで出勤し、学芸の森保育園にお世話になった。学内に乳児を預けられることは安心絶大であった。これまで利用した10を超える保育サービスの中でも、学芸の森保育園は秀逸である。目が行き届き、子どもの成長を示すささやかな変化を嬉しそうにお話し下さる。現在はスタッフの善意とプロ意識によって、限られた予算で支えられているが、保育園を設立した本来の趣旨を活かすためには、試験や振替授業など、土日祝日の不定期な勤務のある大学の実態に合わせた開園を望みたい。現在はセンター試験の際の臨時保育が可能だ。土日祝日・長時間のシッターの自力確保は大変困難なのでこのサービスはとても有難い。

もう一つ有難い制度は育児・介護支援研究補助員(育児・介護を抱える女性研究者が半年間につき220時間、所属講座の研究助手として学内学生を雇用できる)制度である。気力では頑張りたくとも、物理的には育児・介護で確実に失う時間を、補うことができる。

また、学内学生の研究能力を教育するインセンティブが生まれ、指導に力を入れるようになる。私の中での大きな変化は「助けられている分、きちんと仕事をして成果を出したい」と感じるようになったことだ。「だから女はだめだ」「こんな制度はもうやめよう」とならないように。

【お問い合わせ先】
人事課職員係　清水
内線:7123
E-mail:syokuin@u-gakugei.ac.jp
FAX:042-329-7127

東京学芸大学男女共同参画推進本部
〒184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1
TEL:042-329-7108　FAX:042-329-7114　E-mail:danjo@u-gakugei.ac.jp
URL:http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/　詳しい情報等はホームページでご覧ください。

男女共同参画支援室
TEL/FAX:042-329-7894　E-mail:shien1@u-gakugei.ac.jp
URL:http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/support/